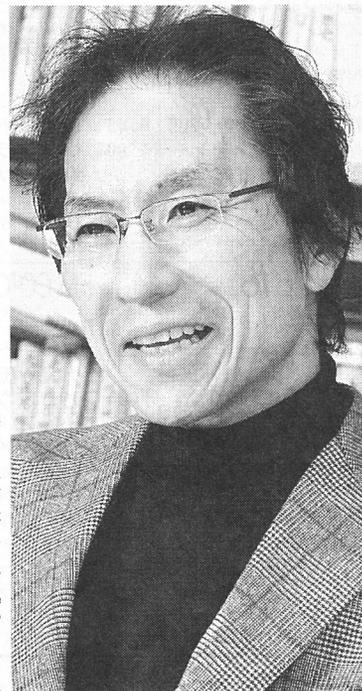


人間発見



政治ばかりか森羅万象についての評論で知られる東京大学大学院情報学環教授の姜尚中さん(61)。最近では自伝的小説「母・オモニー」で小説家としてもデビュー、マルチタレントぶりを発揮している。

現在はセンター長として、2010年10月に設立した東大現代韓国研究センターを一人前にすることに忙殺されています。現代韓国を研究し、日韓両国を中心に東アジアの今後を考える組織が日本の大学にはほとんどなく、設立の必要性をかねて訴えてきました。幸い韓国国際交流財団の支援を受けて設立にこぎつけ、シンポジウムの開催、研究会の立ち上げ、韓国大使館との折衝などに明け暮れています。

韓国研究の専門組織、東大で立ち上げに奔走

独留学中に出会った1枚の絵が人生に影響

素直に作品と向き合い、キヤスターも軌道に

現在はまだ整えるべきことはたくさんあります。東大のカウンターパートともいえるソウル大学にはトヨタ自動車の支援で日本研究所が設立され、実績を上げている。私の親、日本は育ての親のようなもの。何とか両国を近づけたいと熱望しています。本来の仕事は大学院生の研究指導やゼミで院生に政治学などを教えること。将来優れた研究者になるはずの約20人の若者と議論すること、私も大きな知的刺激を受けています。

当センターも韓国大手企業に支援を仰ぐと交渉しているところ。海を挟んだ2つの国で互いに研究を進め、協力できたら素晴らしいことです。東大は政官財で日本の将来を左右する重要な人材を輩出している教育機関。彼らに現代韓国のことを知ってもらうことは、両国や東アジアの発展に大きく貢献する。私にとって韓国は生

09年4月から2年間務めたNHK番組「日曜美術館」のキヤスター役は姜さんの隠れた才能を開花させた。実は小学校に入学する前から絵

画が好きで絵を描いていました。小中学校では県のコンクールで入賞したこともある。野球に明け暮れていたので、絵画の道には進みませんでした。

「日曜美術館」の話は、ドイツの画家アルブレヒト・デュラーの特集する回にゲストとして呼ばれたことがきっかけです。私がドイツ留学中に彼の作品「自画像」に出会い、強烈な印象を受けました。そのことを番組で話したところ、番組プロデューサーがよく覚えていて、新年度からのキヤスター

影響を与えています。ドイツ留学時代にミュンヘンの国立美術館アルテ・ピナコテークで見たデュラーの「自画像」。約500年前、当時の私と同じくらいに描いた自画像はキリストのアイコンのように、私を見つめていた。「私はここにいます。おまえはどこに立っているのだ」と言わんばかりに。憂鬱な気分、気持ちが閉ざされていた私は、一気に解放されて自分を取り戻した。背筋を伸ばして前進しようという気持ちになったのです。1枚の絵が人生に計り知れない影響を与える実例でした。

1を要請された。最初は「門外漢だから」と断ったものの、「専門家の評論は期待していない。視聴者目線で、歴史や社会の観点から自由に論じてほしい」と説得されました。

キヤスターの2年間は正直きつかった。1週間に1回の番組収録で、時々泊まりがけの現地ロケがあった。準備が大変だったし、緊張の連続でしたが、自分の感性を大切にして素直に作品と向き合えばいいと悟り、半年後には軌道に乗りました。

（聞き手は編集委員 木戸純生）

日韓の絆を強める